

ひひる*のデザイン

不気味、毒、うす汚い・・・ こういった先入観が広くまん延しているのだろう。蛾と聞くだけで眉をひそめ、肩をすくめる人が多い。小学唱歌にうたわれ「ちょうちょ、ちょうちょ」と幼子も愛でる蝶に比べ、蛾は正視されないばかりか、そこに存在することすら許されなかったりする。濁点一字の呼び名からして、美しかろうはずがない。

かくいう私も小学生の頃、虫とりの最中に大型の蛾を見つけてしまい、たじろいだ経験が幾度となくある。昼に見る蛾は、不活発さがいっそう怪しい雰囲気をかもし出し、近寄りたがい存在感である。

ところが、大嫌いと大好きは隣接していて、ある日突然転移してしまうことがあるらしい。どちらも気になる存在という点で共通しているのだそうだ。私の場合は、中学1年生の頃、その転機が訪れた。蛾を専門に研究する先生との出会い、大阪市立自然史博物館の合宿観察会で、はじめての「灯火採集」体験（当館3階展示室「灯火に集まる昆虫」のような状況）。国語の教科書に出ていたヘルマンヘッセの「クジャクヤママユ」からも影響を受けたかもしれない。以来しばらくは、すっかり蛾の魅力に取り憑かれてしまった。

蝶にはあまり見られない金銀、紅白の斑紋、樹皮のごとく地味な前翅と目の覚めるような鮮やかな後翅。いったん見方が変わってしまえば「不気味」や「毒」は「妖艶」であり、「うす汚い」は「繊細かつ重厚」で、「格調高き和の趣」なのであった。こんなにも多様で美しい生きものが身近に存在したことに気づけなかった自分を後悔し、その発見に興奮したものである。

蛾はわが国から約5,000種が知られている。ざっと蝶の20倍だ。博物館のある三田市の深田公園では、49種の蝶が記録されている⁽¹⁾から、約1,000種もの蛾が見られることになる。兵庫県全域ともなるとその種数はおそらく2,000種は下らないだろう。

今回の企画展「ワンダフルデザイン」では、蛾のデザインをネクタイとして表現してみた。蛾嫌いな方に少しでもお近づきいただくとともに、フレーム効果でデザイン性を強調しようという試み。

幸いなことに、博物館にはこれまで多くの蛾のコレクションを寄贈いただいている。岡村八郎氏、川副昭人氏、高島 昭氏、山本義丸氏、米田満樹氏ら先人によるものである。今回の展示標本はこれらの中から、兵庫県でそんなに労せず観察できるものを選定した。



山本義丸蛾類コレクション
キャラバン事業の機会にご出身の地である
丹波で「里帰り展示」
(2002年9月5日～10日 丹波の森公苑)

ネクタイの試着を楽しんだあとは、モデルの標本をながめて実物の質感を確認していただきたい。蛾の美しさに心奪われる、とまではゆかなくとも、10分以上観賞下さったならば、この企画は成功である。

なお、蛾の観察に季節は問わず、晩秋から早春にかけても好期である。この時期に出現する蛾には、とりわけ繊細で上品なものが多い。とは、ひひる愛好家の常識である。

*「ひひる」は蛾の古名。

⁽¹⁾大谷 剛・中西明德(2001)「チョウはクルマが嫌いらしい」
服部 保ほか(編)「兵庫県三田市フラワータウンのまちづくりに向けて」
兵庫県立人と自然の博物館公園都市研究班。

(自然・環境評価研究部 八木 剛)



ベニシタバ
Catocala electa
(ヤガ科)

デザイン：清水 一陽氏
(県立三田祥雲館高校)